

クロソイ放流技術開発事業 (要 約)

中田 凱久・塩垣 優・早川 豊

餌料系列の単純化・選別・収容密度の検討等種苗量産技術の確立・沖出しサイズ・選別・網替え方法等網生質による大量海中中間育成方法を確立するため実施したのでその概要について述べる。

なお、詳細は「平成2年度放流技術開発事業報告書・クロソイ班」(平成3年3月、水産庁)として報告した。

結果の概要

1. 種 苗 生 産

4月24日から5月17日にかけて産出された仔魚486,000尾を用い54~71日間の飼育で平均全長30mmサイズ稚魚105,405尾を生産した。平均生残率は24.1%(範囲6.9~40%)であった。

餌料はワムシ、アルテミア、魚卵(マダラ・ヒラメ)、配合飼料を使用した。

ビブリオ病の発生と成長差による共食い共倒れがみられた。

2. 中 間 育 成

(センター前)

平均全長41.3mmの稚魚58,185尾を70日間飼育し、平均全長94.2mmサイズ28,000尾を生産した。標識として全数左腹鰭抜去を施し、脇野沢村地先へ放流した。この間の生残率は64.4%であった。

収容時の魚体が大きい程生残率が高く、主な減耗要因として網替え時のスレによる疾病があげられた。

(北金ヶ沢漁港)

平均全長50.5mmの稚魚40,000尾を59日間飼育し、平均全長82.5mmサイズ25,000尾を生産した。全数右腹鰭抜去後、北金ヶ沢地先へ放流した。生残率は62.5%であった。

餌付きの悪い小型魚の減耗と成長差による共食いがみられた。